

東京都内の美術館における建築雑誌の視座

萩原 柚
指導教員 八尾 廣
建築設計計画 I 研究室

1. 研究の背景と目的

建築雑誌に掲載されている写真は、限られた枚数でその建築の特徴や空間の本質を語ろうとする。それらの写真の撮影と選定には「建築家の設計意図」「編集者の建築をどう見せるか」「建築写真家の視点」が折り重なり影響を与えていると思われる。特に美術館建築には設計者の意図が空間に表れており、特徴的な建築物が多くある。また、空間の構成がわかりやすい建築物である。

本研究では、建築雑誌掲載写真の画角、注視点、写真に含まれる建築的要素に着目し、これらを分析することにより、建築雑誌掲載写真が何に着目し何を伝えようとしているか、その視座を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

新建築データ（1985年1月号～2021年12月号）に掲載された美術館のうち、現地調査を行える東京都内の24館を研究対象とした。

表1 24館のリスト表

美術館名	設計者
1 長谷川美術館	鹿島建設建築設計本部
2 堺田谷美術館	内井昭蔵+内井昭蔵建築設計事務所
3 町田市立国際版画美術館	大宇根・江平建築事務所
4 日暮区美術館	日本設計事務所
5 東京都現代美術館	柳澤孝彦+TAK建築・都市計
6 東京国立近代美術館フィルムセンター	芦原建築設計研究所
7 国立西洋美術館	建設省関東地方建設局営繕部 前川建築設計事務所
8 東京国立近代美術館	国土交通省関東地方整備局営繕部
9 ちひろ美術館・東京	内藤廣建築設計事務所
10 菊池寛実記念 管美術館	板倉建築研究所東京事務所
11 相田みつを美術館	第1ホール 橋本夕起夫デザインスタジオ・橋本夕起夫 阿部徹 MIAS 池田昌弘 大野博史 第2ホール 小泉誠
12 村井正誠記念美術館	隈研吾建築都市設計事務所
13 国立新美術館	黒川紀章・日本設計共同体
14 三菱一号館	三菱地所設計
15 根津美術館	隈研吾建築都市設計事務所
16 東京都美術館	前川建築設計事務所
17 五島美術館	清水建設
18 六町ミュージアム フローラ	横河建設工房
19 東京都庭園美術館	久米設計
20 千代田北斎美術館	妹島和世建築設計事務所
21 巖石山房記念館	フォルムデザインー夫
22 大倉集古館	谷口建築設計事務所
23 アーティゾン美術館	日建設計
24 SOMPO美術館	大成建設一級建築事務所

1) 現地調査

建築の特徴や空間の本質を捉えることを意図し、東京都内24件の美術館を訪問、建物内外の写真を自らの視点で撮影する。

2) 建築写真の分析

- ・ 建築雑誌に掲載された写真の画角、視線の角度、撮影点の床面からの高さを割り出し、平面図にプロットする。
- ・ 写真の注視点、写真に含まれる建築的要素を抽出し、平面図にプロットする。

3) 考察

上記分析、及び現地調査時に撮影体験に基づき、建築雑

誌における写真家及び編集者の視点について考察を行う。

3. 分析結果

24館の分析図を作成し、現地調査を行った結果、新たに明らかとなった建築雑誌の視座についてまとめる。

本梗概では、特に気づきの多かった現代美術館と国立新美術館についてとり上げる。

3.1 東京都現代美術館について

掲載ページ冒頭の写真は、メインエントランス屋根を支える印象的なV字型の柱列を捉えている。縦位置の画角で撮影することで、特徴的な部分を切り取っている(図1)。池の北側から撮影された写真は、分析により写真家が池の上に脚立等でカメラを支え撮影していることが分かった。この画角により池に映るエントランスや真っ直ぐな列柱の様子を伺えることがわかる。しかし、池より屹立している鉄棒の彫刻が美術館より強く目に入るため、写真の意図を読み取りにくいと感じた(図2)。プロムナードからメインエントランス側を見た写真では、美術館内部の様子を伺うことができず石垣が写真の左半



図1 南西側からメインエントランスを見る「新建築」1995年5月号、p141から引用

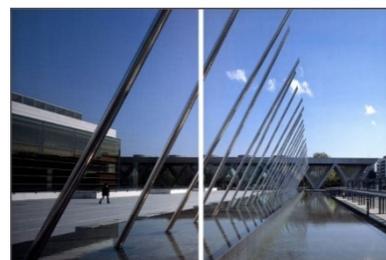


図2 池の北側から見た美術館「新建築」1995年5月号、p142、p143から引用

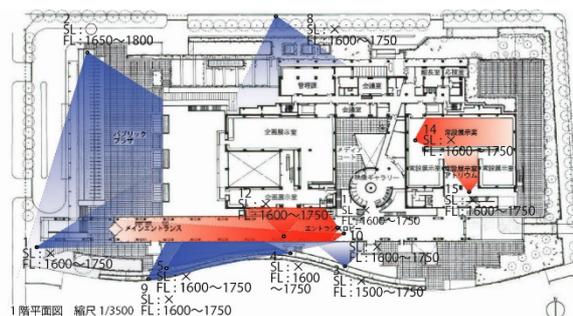


図3 東京都現代美術館 1階平面図

「新建築」1995年5月号、p149の平面図に加筆し作成

分以上を占めているため、キャプションを読んでもなお、その意図を理解することができない。次項には地下1階の写真があり、地下1階に繋がることや美術館が石や水と一体感を表していることも考えられたが、キャプションと写真の画角が異なっているため、この写真の意図を読み取ることは困難であった。

分析図(図3)を作成した結果、撮影点はエントランス周囲に多く集まっており、特徴的なエントランスやその地下部分の紹介に意識が集中していることがわかった。

3.2 国立新美術館について

冒頭に掲載されている写真は美術館のテラスから上向きに外観上特徴的な曲面を描くルーバーを撮影した切り取り写真となっている。しかし、来館者にとって国立新美術館を代表する外観は、曲面を描くルーバーに加え、これと絡む特徴的な三角錐の風除室であろう。ルーバーの切り取り写真を冒頭の写真として用いている意図は読者には伝わりにくいと感じた(図4)。また、美術館の上方からや敷地外から撮影した写真も掲載されていた。このような視点で人は美術館を体験することはないため、これらは身体的な建築体験ではなく俯瞰的、分析的に捉えた写真であると言える(図5)。これらの写真が挟まれることでかえって意図がわかりにくくなっている部分もあった。対象の美術館24件の多くは外部から内部へという順で写真が掲載されていたが、国立新美術館では内観写真の間に外部からの写真が挟まれているため、来館者の空間体験に即していない。

分析図(図6)からはエントランス周辺やエントラン

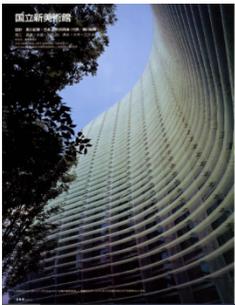


図4 外壁
「新建築」2007年1月号、
p58より引用

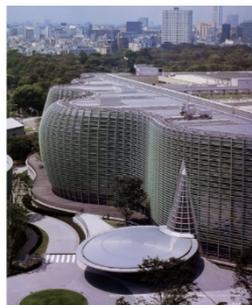


図5 東側外観
「新建築」2007年1月号、
p59より引用

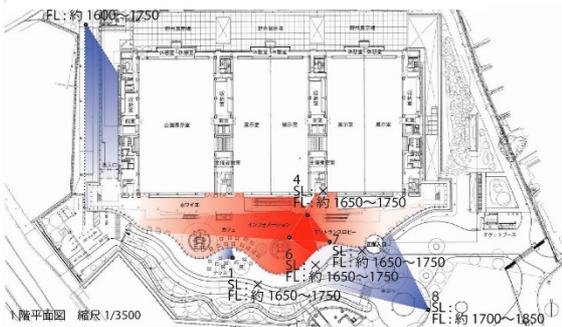


図6 国立新美術館 1階平面図
「新建築」新建築社、2007年1月号、p69掲載図面に加筆し作成

スロビーにある逆三角錐の建築要素を捉える画角が多いことが分かる。これらは、曲面を描くルーバーや逆三角錐の建築要素を代表的な空間的特徴と捉えている。

3.3 GA JAPAN との比較

次に新建築とGA JAPANを読者の視点から考察する。

GAJAPANの掲載写真は、まず個々の写真が何を捉え、何を伝えようとしているかの撮影意図が、キャプションを読まずとも理解できることに気づいた。その多くは、建築の外観における形態を的確に捉え、内部においては「空間」を捉えようとしていることが、新建築の掲載写真と比較することで改めて認識できた。また、多くの事例では外部から内部にかけ来館者が身体的に建築やその内部空間を体験する順序で写真が掲載されている。一方、新建築では建築の部分を切り取った写真も多く掲載されている。これらはその「部分」を特徴として捉えるものであるが、建築全体の特徴や内部の空間を伝えるものではなく、絵としては印象的であるが建築について伝える情報量は少ない。新建築ではこうした「切り取り写真」を用いることが、理解を妨げる一つの要因となっていることがわかった。

さらに掲載ページの「誌面構成」にもおいても違いが認識された。新建築では、図面掲載部の余白にまで小さな写真を埋め込んでいるため、図面の判読を妨げると同時に、写真も小さく判別しづらく、相互に悪影響を与えている。これに対し、GA JAPANでは写真掲載部分と図面掲載部分は明確に切り分けられており、図面、写真共に閲覧する際に余計な情報がなく極めて見やすい。これは、図面掲載部分の余白をそのままにしているからできる構成であり、写真の掲載点数も少なくなりがちであるが、個々の写真の伝える意図、誌面全体の伝える意図が共に明快であり、かつ不要な情報がないのでかえって建築の情報は圧倒的に読者に対して伝わるものとなっている。

4. まとめ

24件の美術館建築の掲載写真の分析を通じて、建築写真は説明なく写真のみで意図が伝わるものでなければ、掲載意図を伝える上でも効果的ではないことが理解できた。また、建築雑誌の誌面構成は図面掲載部分と写真掲載部分を明確化に分けることも重要である。

建築雑誌は、読者に対する確かな情報を与え、その建物を見に行きたいと思わせるようなものであるべきだ。そのためには、実際に訪問した際に身体的に建築と空間を体験するイメージに即しながら、写真撮影および全体の誌面構成においてそれぞれ明確な意図を持ち構成することが重要であるということがわかった。

5. 参考文献

- 1) 株式会社新建築社：「新建築」東京都現代美術館 pp.141~155：1995.5
- 2) 株式会社新建築社：「新建築」国立新美術館 p58~p71：2007.1
- 3) A.D.A.EDITA Tokyo：「GA JAPAN 082」国立新美術館：2006.9